教職を専攻する大学生に対する発音練習、教室英語フレーズ練習と英語活動の実践練習による学生の小学校英語授業への自信の変化について

宮　腰　宏　美

研究紀要第 54 号　抜粋

岡 崎 女 子 大 学
岡崎女子短期大学

令和 3 年 3 月 15 日発行

【研究ノート】

教職を専攻する大学生に対する発音練習、教室英語フレーズ練習と英語活動の実践練習による学生の小学校英語授業への自信の変化について

宮腰　宏美*

要　旨

本研究は、教員養成校で小学校教員を目指す学生が、英語の発音や小学校の教室英語の練習、英語のゲームや英語の歌などの実践を通して、将来的に教壇に立ち英語授業を行なうことに対する不安を減らし、自信を上昇させることができるかどうか変化を明らかにすることを目的としている。

質問紙調査の結果、英語授業を行なうことに対し1名が「少し自信がなくなった」と回答した。松宮(2013)は、自身が行なった実験及び調査において「外国語活動および外国語科で学級担任が話す英語の量」、「日本語の量、準備にかかる時間」など、学生が模擬授業の経験を通し実際の授業へのイメージが具体化したことで、逆に不安が増加し自信低下につながったと報告している。小学校英語授業内で使用する教員の英語と日本語を話す量の割合は、クラスルームイングリッシュや教員の英語力に左右されるため、大学1年時より英語の積み重ねを行うための授業計画の検討が今後の課題となる。

キーワード：小学校英語、授業実践、自信

Ⅰ．研究の背景と目的

2020 年度より教科としての英語が小学校の 5、6 年生対象に始まった。平成 30 年度に文科省が行なった調査「英語教育実施状況調査」によると、2018 年にアンケートに回答した小学校教員 88,157 人中の 80.5%にあたる 60,117 人が英語授業を担当しているのは学級担任であり、11.2%(9,691人)が専任の英語教員が英語授業を担当していると報告がある。同資料によると、2013 年の調査時には ALT を活用している小学校が 7,735 人であったのに対し、2018 年の調査時には 13,044 人に増加しているほか、ALT が授業に参加する割合も 2013 年の 58.4%から 2017 年の 71.4%に増加していた(文部科学省, 2018)など、各自治体や学校において、外国語科や外国語活動での担任の負担を減らす努力が見られている。2017 年度に告示された小学校学習指導要領には「指導計画の作成と内容の取扱い」の事項において、外国語活動については「英語を取り扱うことを原則とすること」、外国語科については「英語を履修させることを原則とすること」と定めている(文部科学省, 2018)。そのため、小学校教員は英語が得意不得意に関わらず、特に高学年においては教科として英語の授業を担当し、同時に評価もしなければならないという立場に立たされている。

現在教員養成校では、小学校教員を目指す学生に対し外国語活動および外国語科にかかる教授法の授業を行なっている。将来小学校教員を目指す大学生は必ずしも英語を得意としている学生という訳ではないが、そういった学生が小学校教員になった際に堂々と教壇に立てるよう、教員養成校では学生に指導していかなければならないという使命を負っている。

本研究では、小学校教員養成校にて小学校教員免許を取得する予定の学生が、英語の発音や小学校の教室英語を練習すること、またゲームや歌などの実践を通して、将来小学校の教員として教壇に立ち、英語授業を行なうことに対する不安を減らし、自信を上昇させることができるかどうかについて研究する。

*岡崎女子大学

Ⅱ．先行研究のレビュー

１．英語授業に対する現職教員の英語に対する不安について

2019年に語学教室を運営する企業であるイーオンが現役小学校教員270名を対象に行なった「小学校の英語教育に関する教員意識調査2019」は、アンケートに回答した教員の66%が英語を教科として小学校の5、6年生に教えることに不安を感じており、回答した教員の50%が小学校の3、4年生に外国語活動を行い、英語を教えることに不安を感じていると報告している(イーオン, 2019)。英会話教室や英語教材開発を手がけているmpi松香フォニックスが2017年に「学習指導要領改訂案を踏まえた小学校の英語教育に関する意識調査」を現役小学校教員206名を対象に行なった結果、小学校5、6年生の英語の教科化に伴い英語授業を実施する上で最も困難であると感じていることは「英語で話すこと」、「英語でやりとりをすること」であることが明らかとなった。また、アンケートに回答した小学校教員自身の英語力については、6割以上が自身の英語力に自信がないと回答していることが報告された(mpi松香フォニックス, 2017)。小学校教員の英語力・指導力に関する不安について、米崎ら(2016)は、「20年程前より外国語教育に関する様々な調査が様々な機関や組織によってなされてきたが、調査開始から20年経った現在でも小学校教員の外国語授業に関する不安は払拭されていない上、これから更に他教科とのバランス、児童への負担と混乱、授業評価、小学校英語教育の本質の理解といった新たな不安要素を小学校教員は背負わされることになると指摘している。小学校教員養成課程における英語運用能力について櫻井(2018)が現職教員に対してアンケート調査を行なったところ、英語の4技能の中でスピーキングが最も苦手であるという教員が多く、現場で教えるにあたりスピーキング力を大学時代につけておきたかったと述べていると報告をしている。併せて櫻井は発音指導の重要性について述べており、その指導においては音声のみならず唇や舌の動きなど視覚的な情報に基づく指導が必要であり、少人数で学生それぞれの発音を確認しながら指導する必要があると述べている(櫻井, 2018)。米崎ら(2016)が174人の現職教員に小学校外国語活動の教科化・低学年化に対する小学校教員の不安についてアンケート調査を行なったところ、英語発音力への不安については「発音に敏感な時期に間違った発音で指導すれば子どもたちの発音は間違ったものになるのではないか」といった教員自身の発音力を心配する声がほとんどであったと報告している。

２．英語授業に対する大学生の英語に対する不安について

福和と中津(2014)は、小学校教員を志望する大学生の小学校外国語活動に対する不安度の調査を、小学校教員を目指している154名の大学生に行なったところ「小学校外国語活動を担任教師として行うことに不安を感じている」という回答が全体の59%であったが、回答した59%の学生のうち、英語学科以外の学生の回答では70.7%が不安を感じていると回答していたと述べている。同じように英語学科以外の学生の回答では「発音指導に不安を感じている」と回答した学生は、71.9%にのぼったことが報告された(福和・中津, 2014)。英語を得意としない学生は、英語授業を行なうことに対してより不安を感じていると考えられる。木原(2017)は、小学校教員を目指す100人の学生にアンケートを実施したところ、51人の学生が将来小学校で担任として外国語活動の授業を行なうことに対する不安であると回答しており、その理由として「苦手意識をもっている」「英語力の不足」「発音に自信がない」等が挙げられていたと報告している。回答した学生達は、将来外国語活動の授業を担当するために必要な自身の英語練習として「英語の発音練習」、「英会話練習」、「単語数を増やす」の順で努力の必要性を挙げていた(木原, 2017)。英語が苦手であると感じている学生も小学校の教員になるにあたり、英語学習への努力の必要性を認識しており、発音、英会話、単語数を増やすことなどについて努力しようという意志を伺うことができる。小学校教員を志望する大学生の英語活動に関する意識調査を行なった名畑目(2014)は、アンケートに回答した大学生の多くは英語活動を教員として教えることに不安を抱いており、回答したうちの約半数である英語に好意的な学生は、英語を教えることが楽しみであると感じているが、英語に否定的な印象をもっている学生達は英語活動を行なうことに大きな不安を抱えていることが示されたことにより、子どもに楽しい英語活動を行なえるような教員の育成には、大学生自身が英語によるコミュニケーションの楽しさを、実体験を通して学ぶことが必要であると述べていた。名畑目(2014)が行なったアンケートに協

力した大学生達からは、外国語活動を担当する小学校教員にはスピーキング力、英語でのコミュニケーション能力、英語の発音が重要であるため、発音練習、スピーキング練習、模擬授業、授業実習を通し小学校での実践方法を学ぶことを望んでいるとの報告がなされている。発音や英語で話す活動の重要性、また、大学生自身が英語活動の楽しさを実体験することが重要であることから、本研究では発音の勉強をしつつ、英語活動の楽しさを実体験することに重点をおいた取り組みをする。

３．英語を苦手と感じる大学生の特性および有効な英語学習の方法について

英語授業に不安を抱く学生は、英語が苦手であったり嫌いであったりする学生が多く、英語が苦手な大学生は「大学入学までの人生における英語学習への挫折の経験からくる不安」、「英語学習に対する目標の維持の困難さからくる不安」、「大学で英語を再度学ぶ際の不安」の合計 3 つの不安をもっていると千田は指摘している（千田, 2013）。英語学習への挫折の結果、英語の意欲を喪失した要因について、津村（2010）は「文法が難しい」、「試験が難しかった」、「覚えることが多すぎると感じた」、「授業が難しかった」、「どうしてもテストで良い点が取れない」、「上達しているかどうかわからない」、「勉強する方法がわからない」などであると報告している。英語学習に関する負の経験を積んだ結果、意欲を喪失している者に対して大学入学後も中学高校と同じような学習をさせようとしても、再び学習者が積極的になることはないと酒井ら（2010）は指摘している。更に、英語学習への意欲を失っている大学生を英語の授業に積極的に参加させるためには、これまで体験したことがないような方法を使うことで、英語学習そのものに興味をもたせる必要があり、教科書の英語を読んで訳すだけの授業は好ましくないと牧野（2013）は指摘している。具体的な取り組み案として（牧野 2012a, 2012b, 2012c, 2016）は、「英語での協同学習を行なうためのグループでのスピーチトレーニング」、「洋楽を使った英語聞き取りのトレーニング」、「チャンツや英語劇を使ったスピーキング練習」、「英語絵本を使いリーディングに興味を持たせる」等、中学校や高等学校で行なっていない方法を使うことが有効であると報告していることから、今回は、Siri や OK google を発音及び教室英語のフレーズ練習に使用することで、今までとは違った英語学習の在り方のひとつを体験するという試みも行なった。

Ⅲ．対象と方法

１．調査対象

調査対象は、岡崎女子大学子ども教育学部子ども教育学科 3 年生英語科教育法受講者 23 名であった。調査期間は令和元年 10 月〜1 月の 4 ヶ月間で、研究方法として、質問紙調査を用いた。

調査内容は、(1) 発音練習について(4 件法)　(2) 発音練習について(自由記述)　(3) 発音練習結果について(5 件法)　(4) 教室英語について(4 件法)　(5) 教室英語について(自由記述)　(6) 英語活動体験について(選択)　(7) 英語活動体験について(自由記述)　(8) 英語活動体験について(4 件法)　(9) 英語の授業を行なうことについて(5 件法)　(10) 英語自体に対する気持ちの変化について(5 件法)であった。質問紙調査は、第 13 回の授業時に調査を行なった。

質問調査項目について、岡崎女子大学・短期大学研究倫理委員会にて審査の上承認をうけた(承認番号 49)。質問紙調査を始める前に、改めて本研究の目的を伝え、調査の協力および本研究の論文化と内容公開について同意を得た。

２．実験方法

本研究では、実験の方法として、(1)発音練習（発音練習のインプット）(2)Siri や OK google を使用した教室英語のフレーズ練習（発音練習のアウトプット）(3)英語の絵本・英語の歌・英語のゲームなどの英語活動実践をさせるという 3 つの方法を用いた。

２−１．発音練習について

英語授業に不安を抱く学生は、英語が苦手であった本研究では、/ l /、/ r /、/ ð /、/ θ /、/ s /、/ v /、/ f /、/ t /、/ p /の子音の練習を行なった。1 回の授業につき 1 つ新出の子音を学習し、合計 9 つの子音の発音を継続的に練習した。いちど習った発音は毎週練習することで繰り返し何度も同じ発音を練習した。また、発音方法の確認をするためパワーポイントで画像による表示を行ない、口頭での説明の他に、L の発音では割り箸、R の発音では糸を用いて下の使い方を確認した。P の発音ではティッシュペーパーを用いて息の強さを確認した。

２−２．フレーズ練習及びその録音について

英語科教育法授業では、学習した発音練習のアウトプットとして、英語のフレーズ練習を取り入れた。『3 語でできる！小学校の教室英語フレーズ集』（アルク，2009）にあるフレーズを、1 回あたり 20 フレーズ程、既習の発音に気をつけながら練習した。その後、各自携帯の Siri または OK google を使用し携帯の音声機能が、各自が発音した英語のフレーズを認識するかどうか、携帯の機能に対して話す練習を行ない、最後に練習したフレーズを録音させた。第 1 回から、第 13 回まで上記作業を繰り返し行ない、最終回では自分が録音した最初の記録と最後の記録を比べることで、各自がどれだけ発音の効果が上がったかという自己評価を行なわせた。

２−３．英語の絵本・英語の歌・英語ゲームなどの英語活動実践について

第 1 回の授業の際に、英語の絵本・英語の歌・英語のゲームの見本を見せ、第 2 回の授業より、学生がグループ毎に、絵本・歌・ゲームのどれか 1 つ好きな出しものを選び、毎時間持ち回りで英語活動実践を行なった。

Ⅳ．調査結果

１．分析方法

質問項目 10 項目中、(1)、(3)、(4)、(6)、(8)、(9)、(10)については単純集計を行なった。(2)、(5)、(7)については自由回答からテキストマイニング(ユーザーローカル テキストマイニングツールによる分析 https://textmining.userlocal.jp を使用)を行なった。また、テキストマイニングの結果について、出現頻度及びスコア（TF-IDF 法）の両方を表にまとめた。

２．質問項目ごとの回答結果

２−１．

授業で行なった発音練習は、将来子どもに教える上での助けになると思いますかという質問に対し、そう思うが 20(90%)、まあそう思うが 2(10%)であった。

表 1. 発音練習が小学校教員として、子どもに教える上での助けになると思いますか　（n=22）

項目	そう思う	まあ そう思う	あまり そう思わない	そう 思わない
人数	20	2	0	0
%	90	10	0	0

２−２．

授業で行なった発音練習について、何かコメントなどがありましたらお書き下さいという質問に対するコメントをテキストマイニングした結果、単語が 3 回以上出現したもので、出現頻度が多い方から名詞については、「発音」、「練習」、「舌」、「動き」、「イラスト」の順で多く、動詞については、「できる」、「分かる」、「知る」、「思う」の順で頻出された。形容詞では、「やすい」、「良い」の順であった。スコア順では、名詞では、「発音」、「lice」、「taste」、「rice」、「舌」、「練習」、「動き」の順に高く、動詞では、「行なう」が挙がった。発音練習を舌の動きのイラストを見ながら行なうことでよく分かったという内容の意見が最も多く、lice と rice の発音の違うと意味が違うというタイプの単語をもっと知りたくなったという意見も見られた。

表 2. 出現頻度順（3 以上）

名詞	発音(12)、練習(8)、舌(4)、動き(4)、イラスト(3)
動詞	できる(8)、分かる(4)、知る(3)、思う(3)
形容詞	やすい(5)、良い(5)

※( )内は出現頻度

表 3. スコア順（0.5 以上）

名詞	発音(16.75)、lice(7.65)、taste(3.84)、rice(3.17)、舌(1.31)、練習(0.91)、動き(0.53)
動詞	行なう(2.02)

※( )内はスコア

２−３．

授業で行なった教室英語のフレーズ練習での録音で、最初と最後の録音を聞き比べて、良い意味での変化があったと思いますかという質問について、教室英語のフレーズ練習の結果、最初の録音と最後の録音の聞き比べを行ない、変化があったと回答した学生は6（27%）、少しあったと回答した学生は11（50%）、

何とも言えないと回答した学生は4(18%)、あまりなかったと回答した学生は1(5%)であった。

表 4. 授業で行なった教室英語のフレーズ練習での録音で、最初と最後の録音を聞き比べて、良い意味での変化があったと思いますか

(n=22)

項目	あった	少しあった	何とも言えない	あまりなかった	なかった
人数	6	11	4	1	0
%	27	50	18	5	0

2−4.

授業で行なった教室英語のフレーズ練習は、子どもに教える上での助けになると思いますかという質問に対し、そう思うが19(86%)、まあそう思うが3(14%)であった。

表 5. 授業で行なった教室英語のフレーズ練習は、子どもに教える上での助けになると思いますか (n=22)

項目	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
人数	19	3	0	0
%	86	14	0	0

2−5.

授業で行なった教室英語のフレーズ練習について、何かコメントなどがありましたらお書き下さいという質問に対するコメントをテキストマイニングした結果、単語が 2 回以上出現したもので、出現頻度が多い方から名詞については、フレーズが 2 回、単語が 2 回、英語が 2 回であった。動詞については、できるが 3 回、思うが 2 回であった。スコア順では、名詞として、他の方法、例文、フレーズ、校則の順に高かった。授業で使えそうな英語の基本的なフレーズを知ることができて良かった、始めに比べると自分の発音に変化があって嬉しかった等というコメントの他、Siri などを使った発音練習は大学生だからできることだと思うという意見も見られた。

表 6. 出現頻度順 (2回以上)

名詞	フレーズ(2)、単語(2)、英語(2)
動詞	できる(3)、思う(2)

※( )内は出現頻度

表 7. スコア順 (0. 5 以上)

名詞	他の方法(2. 39)、例文(1. 75)、フレーズ(0. 72)、校則(0. 71)

※( )内はスコア

2−6.

授業で行なった英語の歌・絵本・ゲーム発表の時間で、あなたは歌・絵本・ゲームのどれを行ないましたかという質問に対しては、7 人が歌、2 人が絵本、13 人がゲームを選択したと回答した。

歌	絵本	ゲーム
7 人	2 人	13 人

2−7.

上記6. の活動を行なった感想をお書き下さいという質問に対するコメントをテキストマイニングした結果、単語が3回以上出現したもので、出現頻度が多い方から名詞については、英語が6回、発音が3回、経験が3回、先生が3回、ゲームが3回であった。動詞については、できるが8回、思うが8回、教えるが4回、行なうが3回、楽しむが3回であった。形容詞は、楽しいが5回、良いが5回、よいが3回であった。スコア順では、名詞では、早口言葉、発音、CD、英語、ネイティブ、絵本、アイディアの順に高く、動詞では、行なうが挙がった。コメントとしては、楽しく行なうことができた、楽しむことができた、など、楽しいというコメントを中心に記載されていた。また、準備が大変だったが、みんなが笑顔で活動に参加してくれたのでやってよかった、子どもの前に立って英語を教えることに対する抵抗が減った、という前向きな意見やより楽しめるような声のかけ方をもっと考えたいと思った、という未来に対して前向きな意見も見られた。「先生が英語で全て行なうのは難しいけど、CDやネイティブの先生と一緒にやるなどして、工夫できることが分かりよかったです。」という、将来の小学校英語授業に対して肯定的な考えや「絵本は他のグループでいなかったので、発表をすることができたことは新鮮ではないかと思いました。」「もっと発音をスラスラと言えるようになりたいです。」というポジティブなコメントが見られた。

表 8. 出現頻度（3 回以上）

名詞	英語(6)、発音(3)、経験(3)、先生(3)、ゲーム(3)
動詞	できる(8)、思う(8)、教える(4)、行なう(3)、楽しむ(3)
形容詞	楽しい(5)、良い(5)、よい(3)

※(　)内は出現頻度

表 9. スコア順(0.5 以上)

名詞	早口言葉(3.67)、発音(1.48)、CD(1.29)、英語(0.98)、ネイティブ(0.7)、絵本(0.57)、アイディア(0.5)
動詞	行なう(4.01)

※(　)内はスコア

２−８．

英語の歌・絵本・ゲーム発表の時間は、子どもに教える上での助けになると思いますかという質問に対し、そう思うが21（95%）、まあそう思うが1（5%）であった。

表 10. 英語の歌・絵本・ゲーム発表の時間は、子どもに教える上での助けになると思いますか　（n=22）

項目	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
人数	21	1	0	0
%	95	5	0	0

２−９．

授業開始前と比べ、将来、英語の授業を行なうことに対する気持ちの変化はありましたかという質問に対し、20名（95%）が、「自信がもてるようになった」、「少し自信がもてるようになった」と回答しているが、「少し自信がなくなった」と１名が回答していた。

表 11. 授業開始前と比べ、将来、英語の授業を行なうことに対する気持ちの変化はありましたか

（n=21）

項目	自信がもてるようになった	少し自信がもてるようになった	変化なし	少し自信がなくなった	自信がなくなった
人数	3	17	0	1	0
%	14	81	0	5	0

２−１０．

授業開始前と比べ、英語自体に対する気持ちに変化はありましたかという質問に対し、好きになったが 7（33%）、少し好きになったが 12（57%）、変化なしが 2（10%）であった。変化なしのうち 1 名は、元々好きであるという意見であった。

表 12. 授業開始前と比べ、英語自体に対する気持ちに変化はありましたか

（n=21）

項目	好きになった	少し好きになった	変化なし	少し嫌いになった	嫌いになった
人数	7	12	2	0	0
%	33	57	10	0	0

Ⅴ．考察

本研究では、教員養成校にて小学校教員免許を取得する予定の学生が、英語の発音や小学校の教室英語を練習すること、ゲームや歌などの実践を通して、将来教壇で授業を行なうことに対する不安が減り、英語授業に対する自信をもつことができるかどうかを研究した。

発音練習については、回答した全員が肯定的な回答で、発音練習の際に舌の動きのイラストを見ながら行なうことが良かったと回答している。Siriやgoogleを活用した教室英語のフレーズ練習については、最初の録音と最後の録音の聞き比べを行ない、フレーズにかかる発音についてポジティブな変化が見られたと回答した学生は全体の77%であった。また「授業で使えそうな英語の基本的なフレーズを知ることができて良かった」、「始めに比べると変化が合って嬉しかった」等というコメントの他、「携帯をもつ大学生だからできることだと思う」という意見も見られた。Siriやgoogleを使用したフレーズの発音練習については、あくまでも教員を目指す学生の発音練習であったため、携帯などが使用できる人である。しかしながら、もし児童にフレーズの発音練習を行なう場合には、小学校にあるコンピュータやヘッドセットを使用することになる。文部科学省（2019）は、学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果について、児童5. 4人あたり教育用コンピュータ１台が使用できる状況であり、インターネット接続率は、93. 4%であると報告している。音声認識機能はgoogle chromeで使用することができることか

ら、小学校においても設置してあるパソコンにgoogle chromeをインストールし、ヘッドセットを使用することで、英語の音声認識機能で、自分の発音を確認することも可能であるが、その際には、全てのパソコンの言語設定を「英語」に切り替えなければならない。小学校教員の労働量を考えるととてもそれができる環境であるとは思えない。では、最近小学校に普及しだしているタブレット型のものではどうかとなると、2017年度の普通教室のLAN整備率は40. 7%であり、タブレットを使って行なうということも難しい。小学校によってはシャドーイングやディクテーションができるアプリを既にインストールしている学校もあるため、小学生への発音練習としては、既成のソフトなどを活用するということが無難であると考えられる。

授業で行なった英語の歌・絵本・ゲーム発表では、7人が歌、2人が絵本、13人がゲームを選択し、それらの活動は子どもに教える上での助けになると思いますかという質問に対して全員がポジティブな（そう思う、まあそう思う）回答をした。また、自由記述をテキストマイニングしたところ、「楽しく行なうことができた」「楽しむことができた」など、活動が楽しかったというコメントを中心に記載されていた。また、「準備が大変だったが、みんなが笑顔で活動に参加してくれたのでやってよかった」「子どもの前に立って英語を教えることに対する抵抗が減った」「より楽しめるような声のかけ方をもっと考えたいと思った」という前向きな意見が散見された。

授業開始前と比べ、将来、英語の授業を行なうことに対する気持ちの変化はありましたかという質問に対し、95%が「自信がもてるようになった」、「少し自信がもてるようになった」と回答し、1名が「少し自信がなくなった」と回答していた。この回答の理由については不明であるが、英語の模擬授業などを通して自信を低下させた結果について、松宮(2013)は、自身が行なった実験及び調査から模擬授業の経験を通して実際の授業へのイメージが具体化することで逆に不安が増加し自信低下につながったと考えられると報告している。具体的な不安の例としては、外国語活動および外国語科で学級担任が話す英語の量と日本語の量、準備にかかる時間、小学生の英語の理解度、ALTとのティームティーチングなどを松宮(2013)は挙げていた。授業内での英語と日本語の話す量の割合については、授業内でのクラスルームイングリッシュやスモールトークに関わってくること、またそれらは学生の英語力にかなり左右されることから将来教員を目指す学生に対しては、大学1年生からの英語の積み重ねを行なう必要がありその為の準備が課題となる。

Ⅵ. まとめと今後の課題

本研究では、サンプル数が21と少人数ではあるが、発音練習、Siriやgoogleを使用したフレーズ練習、英語の歌・絵本・ゲーム発表などで活動した結果、授業開始前と比べ、将来、英語の授業を行なうことに対し全体的にポジティブな自信への変化につながったことが明らかになった。しかし、将来小学校教員となる大学生自身が「自分のもっている単語や外国語の文法などの知識を全て使いなんとか伝達しようとする体験」を行なうことができたかというと、そうではなかった。

東京学芸大学が行なった「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」の平成 28 年度報告書には、小学校で英語を教える上で、教員を目指す学生が卒業までに身につけておくべき英語力の目標を英検2級程度に設定をしている。本学科学生の英語授業に対する自信の持ち方としては、やはり英検2級程度の英語力があると比較的自信をもって授業に取り組んだり、模擬授業に臨んだりしている。

小学校教員を目指す大学生が英語への自信喪失から英語の授業において教壇に立つことに自信を喪失しないよう配慮しながらも、自分のもっている単語や外国語の文法などの知識を全て使いなんとか伝達しようとすることを体験することで、自分の英語力について自己認識をし、英語学習自体への積極的動機につながればよいと考える。

今後の課題として、1年生からの英語の積み重ねを行なうべく、指導上のカリキュラム構成の吟味が必要であること、また次回の課題として、自分のもっている単語や外国語の文法などの知識を全て使いなんとか伝達しようとすることを体験することができるような手だてを考え、それを授業に取り入れることが必要であると考える。

付記

本研究は、令和元年度岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理委員会による研究倫理審査 No. 49 の承認を受けて実施している。

引用文献

1) イーオン(2019)『子どもの英語学習に関する意識調査 2019』
https://www.aeonet.co.jp/company/information/newsrelease/pdf/aeon_190808.pdf(2020.2.04 閲覧)

2) 木原美樹子(2017)「小学校教員を目指す学生の英語に関する意識と今後の課題 −外国語活動を担当するにあたって−」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要』49、pp. 77−82

3) 酒井志延, 中西千春, 久村研 清田洋 , 山内真理, 間中和歌江, 合田美子, 河内山晶子, 森永弘司, 浅野亨三, 城一道子(2010)「大学生の英語学習の意識格差についての研究」『リメディアル教育研究』5(1)、pp. 9−20

4) 櫻井千佳子(2018)「小学校教員養成課程における英語運用能力の育成に関する一考察」『武蔵野大学教育学論集』4、pp. 91−107

5) 千田誠二 (2013) 「大学初級英語クラスにおける学習者の不安について」『中部地区英語教育学会紀要』42、pp. 175−181

6) 津村修志 (2010)「英語学習意欲喪失の要因と英語の好き・嫌いとの関係」『大阪商業大学論集』5(5)、pp. 27−42

7) 東京学芸大学 (2017)『文部科学省委託事業 英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業平成 28 年度報告書』
http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/report/index.html (2020. 6. 10 閲覧)

8) 名畑目真吾(2014)「小学校教員を志望する大学生の英語活動に関する意識調査」『小学校英語教育学会誌』14、pp. 131−146

9) 福和寛晴・中津楢男(2014)「小学校教員を志望する大学生の小学校外国語活動に対する不安度の調査」『愛知教育大学紀要』63、pp. 203−210

10) 牧野眞貴(2012a)「自己表現活動における共同学習の有効性一英語を苦手とする大学生を対象として一」『大学英語教育学会関西支部春季大会配布資料』

11) 牧野眞貴(2012b)「英語リスニングにおける洋楽聞き聞き取りの効果検証 英語に苦手意識を持つ大学生を対象として一」『リメディアル教育研究』7(2)、pp. 79−89

12) 牧野眞貴(2012c)「リメディアル教育対象クラスにおける英語 絵本読書の実践報告一読書意欲と語彙に注目して一」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要』2(2)、pp. 281−293

13) 牧野眞貴(2013)「英語が苦手な大学生の自己効力感を高める授業づくり」『リメディアル教育研究』8(1)、pp. 172−180

14) 牧野眞貴(2016)「英語リメディアル授業におけるスピーキング指導と自己効力感の関係についての一考察」『英語教育研究』39、pp. 1−15

15) 松香フォニックス(2017)「学習指導要領改訂案を踏まえた小学校の英語教育に関するアンケート」
https://www.mpi-j.co.jp/contents/shop/mpi/mailpdf/201702_mpipressseminar_kyodopr.pdf(2020.2.04 閲覧)

16) 松宮奈賀子(2013)「外国語活動指導への不安軽減策として教員養成課程に期待される「外国語活動指導のための英語力」の育成— 現職教員と小学校教員を目指す学生の課題認識から —」『日本教科教育学会誌』36(1)、pp. 55−63

17) 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領 (平成 29 年度告示) 』

18) 文部科学省 (2018) 『平成 30 年度小学校等における英語教育実施状況調査』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2019/04/17/1415043_07_1.pdf (2020. 6. 10 閲覧)

19) 文部科学省(2019)「学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果【速報値】について」
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/08/1420659.htm (2020. 6. 10 閲覧)

20) 吉田研作(2009)『3 語でできる！小学校の教室英語 フレーズ集』株式会社アルク

21) 米崎里・多良静也・佃由紀子(2016)「小学校外国語活動の教科化・低学年化に対する小学校教員の不安：その構造と変遷」『小学校英語教育学会紀要』16、pp. 132−146